

作 品 名 美しい髪色に詰まった娘様の想い

投 稿 者 名

所属 病院・施設名

エクセルシオール西国分寺

病院 老健 有料

K様はパーキンソン病とすい臓癌を患い約10年。病と向き合いつつもご趣味である絵を描かれたり、好物の豆乳と甘酒を飲んだりする穏やかな日常を過ごしています。

また、K様はとても身だしなみに気を遣う方で、よく髪を梳いたり服を着替えたりすることを好んでいます。心優しく、「ありがとう」を沢山言って下さる方で、職員がお部屋に伺うと、ベッドで寝ている絵を描いていてもすぐに顔を上げて挨拶してくださり、色や雰囲気から優しさを感じるような絵を描いておられます。絵を描かれている所を見せて頂いていると「ここ座って」と椅子を指して下さったりしてお部屋には沢山の絵が飾られていました。しかしK様は徐々にADLが落ちてゆき、豆乳や甘酒を飲む事が難しくなってきました。ご趣味の絵を描くことも難しくなってきましたが、色付けをベッドで行っていました。

看取り介護が始まって間もないある日の事、K様が娘様に髪を染めてもらいたいと仰いました。実はK様の娘様はイギリスで美容室を営んでおり、これまでもK様が髪を整えたいタイミングと娘様が日本に帰国したタイミングが合った時のみカットとカラーを行っていました。

娘様に早速ご要望をお伝えし、娘様からも二つ返事で了承を頂きましたが、新型コロナウイルス感染拡大により、帰国や待機期間を考えると容易に行えるものではなく、K様の容態を勘案してもご要望を叶える事は極めて困難と思われました。帰国するまでの間はスカイプで毎日連絡を取り、その度に笑ったり、涙を流したりしながら話されていました。職員もK様の様子に心を動かされていました。K様のADLは目に見えて落ちていきました。

しばらく日が経ち、K様が意思表示を行う事が徐々に少なくなってしまってきてしまい、お部屋に伺っても顔を上げるような動きや、苦しそうに「うん」と仰るのが精いっぱいの状態でしたが、ようやくK様と娘様にご面会する事ができるようになりました。感染対策の関係上ガウンやマスクをつけた状態でしたが、声や雰囲気でも娘様とわかるようで、上げる事が難しい頭を上げようとするお姿には心が痛みました。

その数日後、居室で娘様がようやく髪を染めてあげることができました。その頃にはもう意識の有無も分からない状態でしたが、K様は明るい茶色に染められた髪も相まって嬉しそうな、穏やかな表情をされており、娘様もK様の要望が聞けて、最期に自分の手で母の髪を染められてよかった、心の準備ができましたと涙を拭いながらも力強い眼差しをされていました。

髪の色を行ってから数日後、K様はご逝去されました。娘様からは深い感謝を頂き、K様は若

い頃と同じような整った綺麗な髪で旅立たれました。K様のご逝去後、たくさん描かれていた絵は娘様の要望もあり、一部施設に貼られる事となりました。今でも掲示されたK様の絵は新しく入られたご入居者様に「きれいな絵ねえ 誰の絵かしら」と問われる事があります。正直にお答えすることは難しい為、「誰の絵でしょうか でもとても優しい色使いで綺麗な絵ですね。」とお答えしています。ご逝去されてからもK様の絵は、K様の施設で過ごされた様子を思い出させてくださいます。一人一人のご入居者様と真摯に向き合うとご本人とご家族様の喜びも悲しみも共有する事となり、時に辛い事もありますが、K様の場合は絵をみてK様を思い出すことをきっかけに優しい気持ちにしてくださいませ。K様の思い出は今もお私達職員の心に残り、これからも私達の心を温かくしてくださっています。